

音楽科学習指導案

4年3組 阪本 薫子

1. 単元名 「お箏の奏法による音色を意識して《まめがら》の音楽をつくろう」

2. 研究主題

未来そうぞうの資質・能力を音楽的思考力とかがわらせて育成する音楽科の授業デザイン

(1) 単元について

指導内容：〔共通事項〕音色／楽器の音色／箏の奏法による音色

〔指導事項〕A表現(3)ア

教材：《まめがら》わらべうた

子どもたちはこれまで、様々なわらべうたと出合ってきた。昨年には、本教材《まめがら》にリズムパターンを重ねて歌唱し、リズムパターンの特質から生み出される豆や鍋の様子を伝えるために歌い方を工夫する学習を経験している。また、低学年から続けているお箏の学習では、お箏の音色を探したり、爪を付けての音色やピッチカート音色、すくい爪、コロリンなど様々な奏法による音色に出合ったりしてきている。そこで本単元では、昨年に十分に遊び親しんだわらべうた《まめがら》をお箏で演奏し、お箏の奏法による音色を知覚・感受し、旋律を作る音楽づくりではなく、奏法による音色をいかしてイメージを表現する音楽づくりを行い、奏法による音色が生み出す特質を生かしてお箏で表現を工夫することを体験できるようにしたい。

【人と地域と音楽—風土・生活・文化・歴史—遊ばせ歌】

《まめがら》は、子どもたちの生活に身近な豆を題材とし、豆を鍋でいる様子を表す遊びを伴ったわらべうたである。2人で手をつなぐ鍋役と、その中に入る豆役とに分かれて、歌に合わせて身体を揺らして遊ぶ。この遊びでは、「くるりとまわれ」の歌詞に合わせて豆役は別の鍋の中に場所を交代するため、他の鍋に無事に入ることができるかドキドキしながら遊びを楽しむことができる。

【音楽の仕組みと技能—日本伝統音楽—楽器の音色】

このわらべうたの特徴は、音域が狭く、音も少なく、リズムが単純であるところにある。さらに節も短いので、繰り返し歌いながら遊ぶことができる。複雑でないからこそお箏で旋律を演奏することができ、お箏の奏法による音色の違いから音楽に変化をつけることができ、おもしろさを感じるすることができる。

【音楽と他媒体—音・言葉・動き】

《まめがら》は、言葉のリズムと遊びの動きが合っている。友だちと向かい合い、表情を見ながら拍に合わせて身体を動かして遊ぶことによって、身体的コミュニケーションをとったり協力する楽しさを味わったりすることが可能となる。

本単元では、お箏の奏法による音色を意識して《まめがら》の音楽をつくることで、お箏の奏法による音色を知覚・感受し、お箏の奏法による音色の特質をいかした表現の工夫へつなげて学習を展開させる。

(2)単元の目標と評価規準

評価の観点	単元目標・評価規準	具体の学習場面の評価規準
観点1： 音楽への関心・意欲・態度	お箏の奏法による音色に関心をもって意欲的に試したり、記述・発言したりする。	①お箏の奏法による音色に関心をもち、意欲的に試したり、発言したりしている。 ★②お箏の奏法による音色を意識して表現の工夫を提案するなどし、意欲的に演奏している。
観点2： 音楽表現の創意工夫	お箏の奏法による音色を知覚・感受し、イメージが伝わるように工夫する。	★①お箏の奏法による音色について知覚・感受したことを発言したり、適切にワークシートやアセスメントシートに記述したりしている。 ★②お箏の奏法による音色を意識して、イメージが伝わるように表現を工夫している。
観点3： 音楽表現の技能	お箏の奏法による音色を意識し、イメージが伝わるように演奏する。	★①お箏の奏法による音色を意識してイメージが伝わるように演奏することができている。

★は主に学習成果をみる評価規準である。

(3)活動構成の仮説

①子どもの生活経験や学習経験とかかわりのあるわらべうたを教材とし、自らの経験とかかわらせながら学習できるような活動を設定することで、主体的実践力を発揮することができる。

《まめがら》は、日本伝統音楽のわらべうたである。子どもたちは昨年、《まめがら》の旋律にリズムパターンを重ねて歌う学習を経験してきた。生活に身近な豆を題材としているわらべうたであり、学習経験のあるわらべうたを教材とすることで、子どもたちは《まめがら》を身近に感じることができると考える。そして、豆を鍋でいる経験をさせることで、より身近に《まめがら》を感じ、自らの経験をいかしながら学びを進めていくことができると考える。

音域が狭く、リズムが単純であるわらべうたであるからこそ、お箏で旋律を演奏することができる。お箏の奏法による音色を工夫して音楽をつくる活動を設定することで、これまでの学習経験や生活経験と結びつけながら学習を進めることができるので、自ら進んで音色を探したり試したりと、主体的実践力を発揮することができる。と考える。

②他者とかかわりの中で音楽をつくる場を設定することで、協働的实践力と創造的实践力を発揮することができる。

子どもたちが協働的实践力を発揮することができるように3つの活動を設定することにした。1つ目は、個人やペアで見つけた様々なお箏の奏法による音色を付箋で書きためる活動である。見つけた音色を言語化することで、【再経験】で音楽づくりをするときに、ペアで話し合うきっかけになるのではないかと考える。2つ目は、【分析】で表現の工夫の手がかりを得る場面で、工夫として出た意見を全体の場で試す活動である。そうすることで、「イメージを伝えるためにはどう工夫すればよいのか」という目的を共有し、出た意見を試しながらペアでも話し合うことにつながるのではないかと考える。3つ目は、【再経験】で中間発表の場面を設定することである。つくった音楽を聴き合うことで、客観的に演奏をふりかえったり、自分にはなかった考えや感じ方を知ったりすることにつながる。と考える。そうすることで、ペアで目的を共有し、出た意見をあれこれ試しながら考えるという、協働的实践力を働かせながら他者とかかわる姿につながる。と考える。そして、その中で創造的实践力を働かせながら新たなアイデアを出していくことができると考える。

3. 単元計画（全5時間）

ステップ	学 習 活 動	時
経 験	○《まめがら》の学習経験を思い出し、歌って遊び、豆をいる。 ○お箏で《まめがら》の旋律を弾く。 ○お箏を触り、音探究をし、見つけた音を交流する。 ○《まめがら》に見つけた音をいれて演奏し、奏法による感じの違いに気づく。	第1時 第2時
分 析	○異なる奏法による音色を知覚・感受し、イメージを表現する工夫への手がかりを得る。	第3時
再経験	○イメージを表現する工夫への手がかりを基に、お箏の奏法による音色を意識し、イメージに合うようにペアで《まめがら》の音楽をつくる。	第4時 (本時)
評 価	○ペアごとに発表し、アセスメントシートに答える。	第5時

※本案は、次の指導案を参考に作成している。

- ・小島律子著(2015)『義務教育9年間の和楽器合奏プログラム』椿本恵子氏の実践 pp52-54、黎明書房
- ・小島律子編著(2015)『音楽科 授業の理論と実践』楠井晴子氏の実践 pp228-236、あいり出版
- ・小島律子編著(2015)『音楽科 授業の理論と実践』大和賛氏の実践 pp168-174、あいり出版